2-5 水辺のあそび

水辺はこわい場所でもありますが、魚つかみなどを楽しめる場所でもあります。多様な水辺環境があれば、いろいろな魚などの生き物もいて、多彩な地域文化を受け継いでいくことができるでしょう。

1．水あそび

琵琶湖やその周辺の水郷では、古くから王朝貴族の舟遊びが行われていたようです。明智光秀の三女、細川瑤子（ガラシャ夫人）は、姉たちが怖がる琵琶湖で好んで舟遊びをしていたと言われています。

また、近江八幡の「水郷めぐり」も、かつての宮中の舟遊びをまね、近江八幡城主豊臣秀次が「舟ゆき」として始めたものと言われています。絵図や俳句・和歌にもあみ舟遊びなどの様子が描かれています。

これらのような、大人が琵琶湖を楽しむ様子は多少なりとも言い伝えられていますが、当時の子どもたちがどうしていたのか、残念ながら知る由はありません。

2．身近な水辺の魚つかみ

時代はくだりますが、20世紀になると写真映像も含め、子どもたちの水辺遊びの実態が見えてきます（写真2-5-1）。滋賀県には大きな琵琶湖があり、古くから湖水浴が楽しまれていました。琵琶湖から遠いところでは川や小川、水路などが格好の水辺遊びの場となっています（図2-5-1）。

写真2-5-1 水路での魚つかみの様子（1955年、湖北町）
大人が持つ受け網に子どもが魚を追い込んでいます。（前野隆資、1996）

水辺はこわい場所です。少なからず人がはまったり、おぼれかかったりした経験を持っています。それにもかかわらず、実にさまざまに遊べる場所でもあります。夏は泳いだりして水に入ってはしゃぐ場所ですが、どの世代の人々にとってもとりわけ人気のものは魚つかみです（図2-5-2）。岩陰やウロに隠れている魚を手づかみするもよし、びんづけで捕るもよし、網で追いかるもよし、ザルやタオルですくうもよし、むろん釣りも楽しい。

ちょっと風変わりな魚つかみの方法は「かいどり」でしょう。地方によってその呼び名は多少異なるようですが、小さな水路などで上流側と下流側をせき止めて、水をかい出して干上がらせ、ピチピチはねる魚をつかむ方法です。そういう場所には、たいてい田んぼの脇の水路が選ばれます。見つかったらお百姓さんに怒られることにびくつきながら、数人がかりで行っていました。

残念ながら今は、そういうことをしようという水ガキは減りました。それは魚が少ないだけでなく、ほ場整備などによってそのようなことができる水路がなくなってしまったことにもよります。さらには、そんなところにいる魚を捕っても汚いじゃないか、と多くの人が思い込んでいるようです。心の中にまで水汚染が進行しているようです。

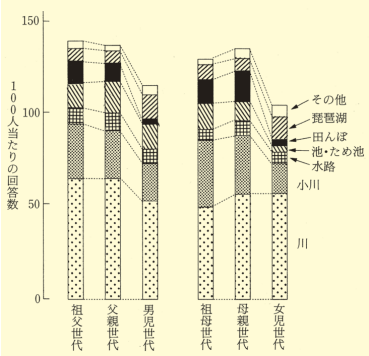

図2-5-1 よく遊んだ水辺の世代・男女比較（嘉田・遊磨、2000）

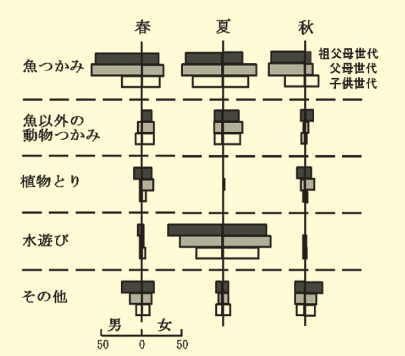

図2-5-2 琵琶湖周辺における水辺遊び
1993年のアンケート調査の結果を祖父母・父母・子供世代ならびに男女に分けて示しています。（嘉田・遊磨、2000）

3．地域文化を育む身近な水辺

ところで子どもたちは魚にさまざまな呼び名をつけています。これに関し、民俗学の渋沢敬三は「魚名は人と魚の交渉の結果、成立した社会的財産である」とし、柳田国男は「子どもたちは身近な環境を観察し多様な名前を作りだした」と指摘しています。

斑点のあるナマズをヘコキナマズと呼び、赤いカワムツをアカムツという。イシンチョやウロリなどと呼ぶと、それは、夏に浅い河原の石の上をはねるようにして泳ぐ小型のヨシノボリを指し、ザルなどで簡単にすくうことができ、醤油で炊くとおいしい、とその姿から捕り方から食べ方まで伝わるのです。これこそ文化でしょう。残念ながら、このような地方独特の魚の呼び名は絶滅しかかっています（図2-5-3）。このような身近な水辺との多様なかかわりを示す文化を育む水辺環境を保ち続けたいものです。

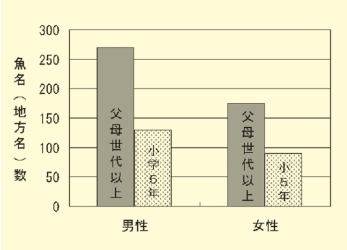

図2-5-3 魚の地方名の世代・男女比較(1000人当たり)
魚名(地方名)数は小学生世代で半減しています。（嘉田・遊磨、2000）

龍谷大学　遊磨 正秀